第1417回（2月27日）

アジアの農業金融について

（東京大学）荏開津　典　生

報告の前半部分では農業金融市場についての2つの学派について紹介した。また後半部分では，タイを中心として東南アジアの農業金融の実情について現地経験を踏まえて紹介した。

低所得国の農業金融についてここ10年程の間に批判的な見解が示されてきた。この見解は，農業発展における金融面での補助のもつ役割についての批判から始まっている。

新しい見解は，農村金融市場（RFM）の接近法と名付けられ，これに対して伝統的な見解は農業金融（FF）の接近法と名付けられる。RFMの接近法はオハイオ州立大学農業経済学部および農村社会学部により提唱された。新古典派経済学にその理論的枠組みを依拠しており，いわゆる競争的市場のメカニズムを信頼する立場が特徴となっている。

伝統的なFFの接近法が依然として優勢を占めているが，RFMの概念枠組みはより広い範囲の農業金融活動をカバーするので現状を説明する上で不可欠である。報告の前半部分は，このFFとRFMとの両者の観点からアジアの農業金融市場の現状を再検討した。2つの学派は次の5つの点に関して対照的である。

1.　金融面での補助

FF派は農村経済の成長と公正のために不可欠とみなすが，RFMは有害とみなす。

2.　インフォーマルな金融

FF派は有害とみなすが，RFM派は多くの場合において有用で合法的とみなす。

3.　小農の福祉

FF派は貸付け後の監督を必要とするが，RFM派の接近法は小農はそのために苦しんでいると主張する。

4.　外部の資金

FF派は外部の基金が必要不可欠とするが，RFM派は不必要とする。

5.　使途特定貸付け

RFM派は使途を特定して貸付けることは意味がないとするが，FF派はそれを有用とみなす。

最後にまとめとして，以下の点を指摘した。概して，アジアの農村金融市場の実績は，その貢献度の基準からはかなり良かったが，自立性の基準からは貧弱であった。制度的融資額やメンバーの増加はプラス面を示しているが，貸付回収率の貧弱さはそのマイナス面を示している。アジアの農村金融市場の最近の展開の核心は，国内農業へ，政府系の特別貸付制度により融通される低率の貸付けという形で外部の資金を注入することにある。これらの展開が成功するか否かは政府の介入方法に帰せられる。

これらの展開は，伝統的なFF派の思考法により動機づけられたが，今やあらゆる所で深刻な貸付け不良の問題に直面している。現在の問題の核心部分は，低所得国における農村金融市場が，両方の範疇の基準を同時に満たすことができるかどうかである。新しい農村金融市場（RFM）の接近法によれば，両方の目的は，政府の介入を除くことにより成功裏に達成されうる。しかし，この代替的な戦略は，説得的な証拠を未だに与えていない。実質的な構成員としてインフォーマルな貸し手を含む，自由で競争的な農村金融市場が，それを達成するか否かは未解決の問題である。アジアの農村金融市場の展開は，他の低所得国に貴重な教訓を与えるであろう。

（文責・加賀爪　優）